て許されなければなるまい、彼の述作の如きは、原文の儘を邦語に譯出するに、敢て譯文の臭味を帶びないであらうと思はれる程に、其の發表に文學的色彩を脆却して居る。勿論之を以て本譯書が原書に不忠實であるとは更々云ふのではない。外國語を邦語に譯出することの如何に困難なるかを、他人にも劣らず認め得ると思ふ自分に取つては、本譯書が如何に多くの點に於て敎ふる所の大であつたかは、こゝに譯者に對して謝せなければならない。殊に哲學研究就中認識論的論究述作の極めて尠少なる我が學界に取つて、かくの如き名著が譯出せられたことは誠に喜ぶべきことであると思ふ。本譯書の如きは寧ろ一個の獨立なる述作として、認識論的研究に進まんとするものゝ必讀の入門書として、推奬すべき價あるものと思ふ。兎に角先には紀平學士の認識論の著あり、今又中川學士の此好譯あり、此種の述作の陸續公にせらるゝは、此思想界の風潮の那邊に進展しつゝあるかを覩ひ得る心地して、甚だ愉快に思ふ次第である。（岡野留次郎）

國民道德要領

文學士　吉田靜致
藤本慶祐共著

歐洲戰亂に鑑みて、我が國民は戰後激烈なる國際的競爭場裡に、世界的公民として活動すると同時に、日本國民として活動するの覺悟を決めなければならぬ。然してその活動の道德的基礎は時勢に適應した國民道德であるべきであつて、國民道德の研究詮明は極めて重要であり、亦實に焦眉の急なりとして著者が平素の懷抱を、國民敎育に從事する人々の參考の爲めに著はされたものである。

我が國民道德の由來する遠き神代の昔より今に到る迄の國民道德の發達變遷をば、第一章より第七章に納めてある。第一章我が國民道德の由來、第二章祖先尊崇と家族制、第三章神道の發達、第四章儒敎の發達と其の影響、第五章佛敎の發達と其の影響、第六章武士道の發達及び其の精神、第七章敎育に關する勅語の發布の章下に現有の國民信仰が大陸傳來の印度思想支那思想に影響せられ、歷史の發展に連れて如何に特色ある國民道德が起つたかを略々歷史的に叙述し、第八章國民道德の特質に於て、我が國民道德には顯著なる二大特質――一、忠孝の一致、二、忠君愛國の一致――の存することを闡明し、最後に第九章我が國民道德の倫理學的觀察に於て學的考察に及んで居る。

一國民、一民族の道德をば歷史的に說述することは、昔に溯つて道德の事實を調べるのであるから決して容易ではないが、道德そのものゝ究明にも資するものであつて、學的價値があり此の種の研究の發表せらるゝことは願はしいことである。又時勢の要求と沒交渉でも無く、敎育者の參考にもとの著者の望みは充分に滿たされるであらう。菊版四二九頁、東京寶文館發行、定價壹圓五十錢（尾生光三郎）

宗敎哲學

文學士　石原謙著

本書は『哲學叢書』の第七編として、宗敎哲學の地位及び問題を組織的に說明せんとしたものである。著者は自序の中に『單に初學者を目的とした序論的のもの』と云つて居るが、然し宗敎哲學概論としては內容の最もよく調つたものであり、特に此方面に殆